BCPの実動訓練について【東京都】

〜導入・本動画のテーマ (0:00頃〜)

- 本動画のテーマ: 障害者施設等におけるBCP（事業継続計画）の「実動訓練」について解説する。

---

1. 訓練の2つの大きな分類：机上訓練と実動訓練 (0:10頃〜)

- 訓練は、会議室などで行う「机上訓練」と、実地で行う「実動訓練」に大きく分けられる。
- 机上訓練の特徴:
  - シナリオや状況設定を用意し、それらの状況下でどのように行動するか、BCPやマニュアルを実践できるかのシミュレーションなどを行う。
  - 参加者一人ひとりが考えながら取り組むため、判断力や意思決定能力の向上が見込める。
  - 用意するものが少ないため、簡便に実施可能であり、設定を変えることで様々な状況に備える力を培うことができる。
- 実動訓練の特徴 (0:50頃〜):
  - 人や物を動かして実施する訓練を指し、現場で実際に練習を行い、技術の習得・習熟を図るもの。
  - 机上では分かりづらい動線の確認や、資機材の稼働方法を確認することに向いている。

【ポイント】

- 机上訓練は「思考力・判断力」、実動訓練は「実践力・技術習熟」の向上にそれぞれ主眼がある。両者をバランス良く実施することが望ましい。

【用語解説】

- **BCP (Business Continuity Plan):** 事業継続計画。
- 机上訓練: 図面やマニュアルなどを使用し、災害発生時の対応手順や役割分担などを模擬的にシミュレーションする訓練。
- 実動訓練: 実際に避難行動をとったり、対策本部を立ち上げたり、資機材を操作したりするなど、具体的な行動を伴う訓練。

---

2. 実動訓練の具体例とBCP訓練との関連性 (1:15頃〜)

- 消防法に基づく訓練:
  - 避難訓練や初期消化訓練など、消防法に基づいて定期的に実施されているものは、代表的な実動訓練と言える。
- 自然災害・感染症に関するその他の実動訓練例:

    - （スライドに示された例として）
        - 自然災害関連: 自家発電機の稼働、ライフライン停止時の対応（例：簡易トイレ設置）、安否確認、備蓄品の移動や使用、車椅子などを用いた垂直避難訓練などが考えられる。
        - 感染症関連: 消毒・清掃、緊急時の連絡体制の確認、職員の確保（参集）、ゾーニング（区域分け）などが考えられる。
- **BCP**の訓練内容との関連 **(1:45**頃～**):**
    - BCPの訓練で求められる内容は、「BCPに基づいた事業所内の役割分担の確認」「自然災害や感染症が発生した場合に実践するケアの演習」など。
    - この中で、BCPの訓練と相性の良い実動訓練としては、上記のようなものが例として考えられる。
- 既存訓練との一体的実施の可能性 **(2:00**頃～**):**
    - 感染症**BCP**にかかる訓練: 感染症の予防及び蔓延防止のための訓練と一体的に実施することも可能。
    - 自然災害**BCP**にかかる訓練: 非常災害対策にかかる訓練（消防法に基づく避難訓練など）と一体的に実施することも差し支えないとされている。
    - 工夫の例: 例えば、通常の避難訓練に「業務継続の要素（例：一部サービスを継続しながら避難する等）」を追加したり、BCP発動手順の一部（例：安否確認と情報伝達）を取り上げた訓練を追加することで、BCP訓練として実施するということも考えられる。

【ポイント】

- BCPの実動訓練は、既存の消防訓練や感染症対策訓練と連携・統合することで、効率的かつ効果的に実施できる。
- BCPの要素を意識的に訓練に盛り込むことが重要。

【用語解説】

- 消防法: 火災の予防・警戒・鎮圧、国民の生命・身体・財産の保護、火災・地震等災害の被害軽減などを目的とした法律。
- 垂直避難: 浸水害などの際に、建物のより高い階へ移動して安全を確保する避難行動。
- ゾーニング: 感染症対策において、施設内を汚染区域、清潔区域などに区分けし、人や物の流れを管理すること。

---

3. 実動訓練で取り組むべきテーマの選定 (2:30頃～)

- 実動訓練では、実際に資機材を稼働するものや、移動が必要なものを中心に実施すると効果的。

---

4. 実動訓練の具体例：停電時の電源確保 (2:40頃～)

- 訓練前の重要な検討事項:

    - まず、利用者と職員の安全を守るために、「停電した場合に停止することができない重要な機器や設備は何か」ということを、事業所内で十分に検討する必要がある。
- 訓練を通じて確認すべきこと:
    - 必要最低限の電源確保に問題はないか。
    - 必要な機器や設備は、すぐに使える状態になっているか、などを確認する。
- 訓練結果から課題が見つかった場合の対応:
    - （例）電力不足が見込まれる、老朽化など設備に問題がある、燃料がなくなっている、など。
    - → 新規に購入することを検討したり、非常時の調達先を検討したりするなどの対策を講じ、その内容をBCPに反映させていく。
- 電源確保の手段の種類と特徴 (3:45頃～):
    - 据置型（すえおきがた）:
        - 燃料で動かす大型の非常用電源設備（自家発電機など）。
        - 太陽光発電設備など。
    - 可搬型（かはんがた）／持ち運び式:
        - ポータブル発電機など、移動ができるタイプ。
        - 大きさや発電できる電力量（出力）などが様々。
        - 家電量販店やホームセンターなどでも購入が可能。
- 電源確保の検討例（ある事業所のケース） (4:15頃～):
    - 現状把握: 事業所の非常用電源を確認したところ、消防法に定められた（スプリンクラーや非常灯などのための）非常用電源だけであることが判明した。
    - 検討プロセス:
        - 停電時にも業務を継続するため、改めてどのような用途に電気が必要か洗い出した。
        - さらに電気が必要な場合は、電源設備（自家発電機など）が必要か、電気以外の代替手段（カセットコンロ、電池式照明など）はないか検討した。
        - （スライドの表で整理された結果として）3階個室の室内照明及び1階フロアの冷房については、電源設備を用いて稼働する必要があると判断した。
        - 次に、どのような電源設備を導入するか検討するため、稼働させる設備の消費電力と台数から、必要な電力量を算出した。
        - （この事例では）エアコンの消費電力が大きいため、据置型の非常用自家発電設備を導入するという結果になった。
    - その他の選択肢の例:
        - 太陽光パネルと蓄電池をセットで導入することも考えられる。
        - エアコンではなく扇風機を用いることとし、可搬型の発電機を導入するという場合もある。
- BCPへの反映: こうした訓練や事業所内での検討を通じて、より災害時に役立つBCPとなるように見直しを進めていく。

【ポイント】

- 停電時の電源確保は、まず「何に電気が必要か（優先順位付け）」を明確にし、必要な電力量を把握することから始める。
- 電源確保の手段（自家発電、蓄電池、代替品など）は、事業所の規模や必要な電力量、予算などを考慮して選択する。
- 導入した設備の定期的な点検・維持管理もBCPに盛り込む。

【用語解説】

- 自家発電設備: 商用電源が停止した際に、自家発電により電力を供給する装置。燃料式や太陽光発電などがある。
- 蓄電池: 電気を蓄えておき、必要な時に供給できる装置。

---

5. 訓練後の振り返りと共有、BCPへの反映 (6:00頃～)

- 振り返りの重要性: 訓練を実施した際は、必ず「振り返り」と「共有」の時間を設け、個人の気づきや体験を、事業所全体の財産となるようにする。
- **BCP**への反映: 訓練を通じて明らかになったBCPの不備や課題については、修正するようにする。

【ポイント】

- 訓練は「やりっぱなし」にせず、必ず振り返りを行い、課題を明確にし、BCPを改善していくサイクルを確立する。

---

6. 実動訓練の効果 (6:20頃～)

- 実際に体や資機材を動かしてBCPの内容を習得・習熟することにより、非常時にスムーズに動けるようになる。
- 資機材の使用方法や稼働方法を（複数の職員で）共有することで、特定の担当者しかこれらを使えない、といった状況を回避できる。

【ポイント】

- 実動訓練は、知識の定着だけでなく、実践的なスキルとチーム対応力の向上に繋がる。

---

7. まとめと次回予告 (6:50頃～)

- 実動訓練とは（再確認）:
  - 人や物を動かして実施する訓練を指し、現場で実際に練習を行い、技術の習得・習熟を図るもの。
  - 机上では分かりづらい動線の確認や、資機材の稼働方法を確認することに向いている。
- 実動訓練で実施すべき内容:
  - BCPの記載内容や手順を習得したり、BCPそのものを点検したりできるような内容で実施する。
- 訓練実施後に必ず行うこと:
  - 必ず振り返りと共有の時間を設ける。

    - 洗い出された課題について、BCPへの反映も忘れずに行う。
- 次回予告: 次の動画では「机上訓練」について解説する。

【ポイント】

- 実動訓練は、BCPの実効性を高めるための重要な手段。計画的な実施と、その後の改善活動が不可欠。